

電子自治体と ユニバーサルデザイン

大学における ユニバーサルデザイン教育を 推進しよう

地域における底上げ策

各自治体ではWebアクセシビリティ研修やユニバーサルデザイン(UD)研修が盛んになってきたが、担当者の異動でノウハウが蓄積されないという状況はあまり変わっていない。この現状を打開するため、地域のNPOをUD担当として育成することを提案してきたが、もう一つ、自治体にとっても地域住民にとっても、有効な方法がある。

関根千佳 = 文

株式会社ユーディット 代表取締役
(情報のユニバーサルデザイン研究所)



7月は異動の季節である。せっかく背景まで理解してくれて、使い勝手の良いアクセシブルなサイトを作っていた担当者から異動のあいさつを聞くと、こどもまた賽の河原かと悲しくなる。アクセシブルなサイト作成は、分かっしまえば技術的にはそれほど大変ではないのだが、政府の分離政策のお陰で多様なユーザーに会うことの少ない行政職にとっては、その人たちの使用状況を理解するまでに時間がかかってしまうのだ。担当者の異動によるサイトの質の低下を防ぐため、地域の多様なNPOにユニバーサルデザインの推進者、評価者として参画していただくことは、地域にユニバーサルデザインの視点を根づかせるうえで非常に重要である。当事者の社会参画や就労にもつながる。

だが、総務省の「みんなのウェブ」を使ってサイトを作成しようとしても、また調達基準にアクセシビリティを必須としたとしても、なかなか地元のIT企業のアクセシビリティへの理解は深まらない。JIS規格をとりあえず読みました、というレベルで入札に応じるケースも少なくない。これでは、発注元の自治体も、作る地場企業もあまり分かっていない中で、評価するNPOだけが浮いてしまう危険性がある。至極まっとうな問題提起も、クレマーのよう

に受け取られかねない。

地域での理解者を増やすためにも ユニバーサルデザイン講座を各大学に

これを打開するために、私は各大学でのユニバーサルデザイン講座開設を提案する。教養課程として学生はもちろん、学外の企業人、地元の住民も参加できる特別講座を組むのである。学生としては単位認定の対象とする。教職の必須科目である「情報と職業」の単位の中に入れてもいいだろう。ここで、内容的には、次のようなものを教える。

1. ユニバーサルデザインの概念と企業・行政の取り組み
2. ユニバーサルデザインのコンポーネントであるアクセシビリティとユーザビリティについて
3. アクセシブルなWebデザインの基礎知識
4. サイト評価の実際と改善策の提示

できればこれに、地域でユニバーサルデザイン評価を担っているNPOと協力して、実際の多様なユーザー評価を

加えるべきだろう。だが最低限、この講義を受けるだけでも、学生たちは非常に身近になっているWebサイトについて、公的な性格とアクセシビリティの重要性を知ることができる。

評価対象としては、身近な自治体のサイトを幾つか検証する。複数の自治体サイトを比較検討することで、使いやすいサイトとはどういったものか、社会インフラとしてのサイトのあり方はどうあるべきかを学ぶことができる。

これからの学生たちは、文系であれ理系であれ、何らかの形で情報受発信を避けて通ることはできない。そのユビキタス情報社会で生きていく学生たちとともに、地域の企業人や住民やNPOが、Webサイトに求められる要件を学ぶことは、その地域における社会インフラへの視点を養うことになるだろう。今後の大学にとっても、18歳人口の減少とともに、生涯教育の拠点として地域社会との連携を深めるうえで、またe-Learningによるインターネット大学への転換を図るうえでも、大切な視点になるはずである。

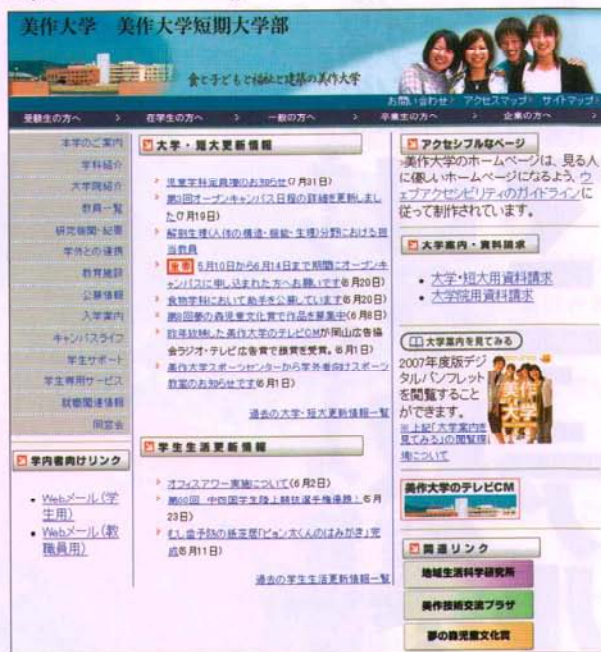
そして、学生たちは、地域の企業や自治体へ就職していく。地域の中に、ユニバーサルデザインやアクセシビリティに対して理解のある卒業生が輩出されていくのだ。その地域のみならず、どこへ就職しようとも、ユニバーサルデザインの視点は、あらゆる仕事や人生の節目で、常に意味を持つことになる。

ユニバーサルデザイン教育の推進は日本全体を住み良いものに変えていく

もちろん、学生にこのような講義を行う大学のWebサイトは、アクセシブルでなければならないだろう。学生たちが真っ先に評価する対象になるものだからだ。

現在では、美作大学や広島大学、長野大学などのごく一部の大学しかサイトのアクセシビリティに配慮していないようだが、これも公的機関の一部として当然視される時代になるだろう。海外では、大学のサイトのアクセシビリティ

美作大学のトップページ
http://www.mimasaka.ac.jp/



ティは配慮されるのが当たり前である。古い建物が多く改造が難しいヨーロッパでは、せめてWebサイトだけでも先にアクセス可能にとがんばっている。

日本では障害学生支援センターを設けている東大や阪大などわずかな大学で、その関連のところだけアクセシブルにするケースも多いが、できれば全学で取り組んでほしいものだ。それは障害を持つ優秀な学生の応募につながり、結果として、ともに学べる環境を作り出し、多くの学生にユニバーサルデザインを理解してもらうことになるからである。

社会のインクルージョンを実現するために、まず、各地で大学のユニバーサルデザイン教育を推進しよう。それは各自自治体サイトのアクセシビリティだけでなく、日本全体を住み良く暮らしやすいものに変えていく力を持つはずである。

